若者の交流・活動促進

○A委員

若者の居場所づくりというより、青年教育や家庭教育などを行い、地域の若者の多くが地域づくりに参加するように、行政の積極的な関与が必要である。

若者が大野への**愛着心を持つように、幼少期からのサポートが必要**である。

○B委員

私の地区の子ども会でも以前は行事を盛んに行っていたが、今では年に1回程度になった。また、若者は行事への参加を面倒だと思う人がある。

中学生、高校生の時期に行事を計画し、実行し、成功体験や充実感を得る機会を得ることも重要である。

○C委員

20代や子育て世代の若い人を見ると、自分の意見をストレートに発信しないが、他人の行動は観察し、自分もこうしたい、子どもにこうさせたいと思う人が多いように思う。そういったことを念頭に置いた情報発信が必要である。

○D委員

青少年健全育成市民会議のパネルディスカッションで、教員や保育士などを体験した生徒が、その職業に憧れを感じていた。

若者の地元愛は18年をつなぐ教育を土壌として育まれるものなので、地道な活動になるが、時間をかけてしっかりと取り組んでもらいたい。

一度外に出た若者に対するアプローチが必要だと思う。例えば二十歳のつどいなど。

若者から「地域の行事が少なくでさみしい」という意見を聞く。

○市長

若者が遊ぶ場所をつくることではなく、**ボランティアや人の役に立つ取り組みへの若者の参加を促すことを考えるとよい**のかも。

事業との連携、将来の見通しといったことがキーポイントになると感じる。ライフプランを考えることも有効。

○教育長

大野高校（大野市）のボランティアサークル「RC「結（ゆい）」が、こども家庭庁の「未来をつくる こどもまんなかアワード」で、こども・若者活動奨励章を受章した。ボランティアや社会貢献をテーマに若者の活動を促すこともよいと考える。

結婚を後押し

○A委員

将来の経済的負担に不安を感じるためか、結婚や出産に消極的である。特に自営業者に対しての給付は不足しているように感じる。

教員に関して言うと、代替職員の確保の見通しが立たないと出産に踏み切れない理由になっていることを懸念する。

○B委員

同じ趣味やつながりを持つ者同士が結婚している。これは同じ価値観や打ち込んだことに対して認め合える間柄だからだと思う、また、子に対しても同じような体験をさせたいということにもつながる。

幼少期から積み上げてきた感情や五感を大切にするようなソフト面の土台づくりが大切だと思う。

○C委員

結婚を望まない人、婚姻関係のないパートナーを選択する人もいることを考えると支援も多様化しないといけない。

結婚支援に年齢要件があるが、実情と希望との乖離があるので、年齢要件の見直しが必要である。

県外から嫁いできた人の感想として、大野は働き者の女性が多いというイメージがあるそうである。自分もそのイメージどおりのことを求められるのではないかと不安があるとのこと。

➤ 対応

P14『若者の交流促進』の記載のように 若者のサークルなどの情報や活動場所を発信することで、コミュニティ活動の広がりにつなげるとともに、ボランティアや社会貢献活動を通じて、若者の活動を促進し、郷土愛を育てていきたい。